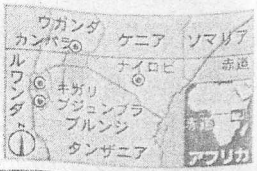
エイズ孤児　ぼく、泣かないもん

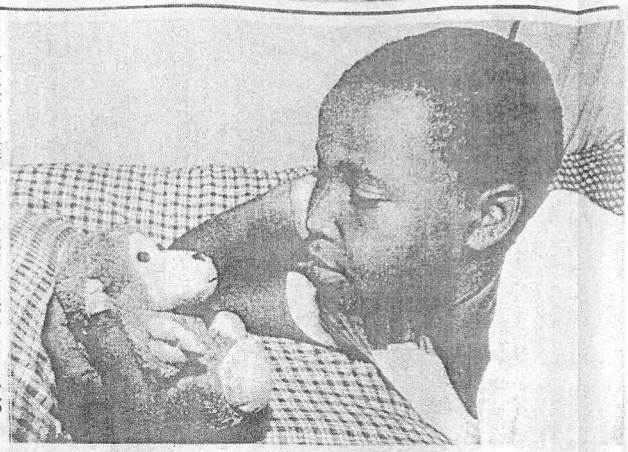
うめく「生」　アフリカ取材から

「怠けるんじゃないよ」

毎日新聞社と毎日新聞社会事業団の「孤児・高齢・難民救済キャンペーン」18年目となる今年、赤道直下のアフリカを取材した。ウガンダでは、1988年に初めて患者が確認されて以来、エイズが全国にまん延。20代、30代の4人に1人が感染者だといわれる。両親をエイズで亡くした孤児も激増。一方、ルワンダでは94年の内戦によって、タンザニアなどに流出した難民の帰還が始まったが、祖国に戻った難民たちには、さまざまな問題が立ちふさがる。うめきながら必死に生きるアフリカの子どもたちに、手を差し伸べたい。

文・小倉　崇保
写真・玉岡　豊曰





エイズで亡くなった母が買ってくれたぬいぐるみを見つめるサラーちゃんの脳裏に、母の姿が浮かぶ　＝ウガンダ・カンパラの孤児院で

「ムギ」が言う　母の代わりに

ウガンダの首都・カンパラ郊外にエイズでUNESCOがあるが、5～17歳の24人が生活する。この孤児院をのぞいてみると、サルのぬいぐるみを離さない少女がいた。ムバジ・サラーちゃん（14）。ベッドに寝る時も、このぬいぐるみと一緒だ。

サラーちゃんはカンパラのスラムに生まれたが、89年に父、90年に母を相次いでエイズでなくした。母は死の直前、「学校の成績が良かったらプレゼントをあげる」と約束した。サラーちゃんは一生懸命勉強し、93のクラスで5番になった。そして、成績発表の翌日、母はこのぬいぐるみを買ってきた。サラーちゃん好みの良かった友人の名前をとって「ムギ」と名付けた。

母の死後、2人の妹と一緒に親戚に暮らしていたが、家賃が支払えず追い出された。近くのスラムに住む祖母の家に転がり込んだ。祖母は2人の見知らぬ男性と一緒に暮らしていた。サラーちゃんは祖母のベッドの下に寝なければならなかった。夜の大人の会話に、耳をふさいで眠る毎日がいやで、この家を飛び出し以来、この孤児院にやってきた。この間、サラーちゃんの心を和らげてくれたのは、ムギだけだった。

ウガンダ政府は「この国には親戚が助け合う習慣がある。エイズによる孤児も親戚が引き取り、家族の温かさを教えるべきだ」との考えから、孤児院設立には積極的でない。このため、この孤児院は地元のNGOなどが運営、ユニセフなどが支援する。

サラーちゃんの夢は弁護士になることだ。恵まれない孤児や女性のために働きたい……。自分の置かれた環境に負けたくない。それが、母の願いだと信じているからだ。

孤児は200万人以上　ウガンダ　ルワンダ

AMDA

ウガンダのエイズ患者救済のため、日本のNGO（非政府組織）などが積極的なキャンペーンなどを展開している。今回の若者に加え、目に見える援助として支援するのも、こうしたプロジェクトだ。

「アジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市）は1985年4月、ウガンダ事務所を設置。昨年12月には、半農半牧の村・ゴグエに250万円をかけて診療所を建設した。内科、外科、産婦人科に歯科治療も可能。医師は近くの町から週に1回程度、巡回。普段は看護婦や助産婦が診療に当たる。1時間以上も歩いて、医師の診察を受けに来るエイズ患者がいる。また、ケニア国境に近いトゥバ村でも、エイズ孤児の救済などで現地NGOから協力を要請されている。

同事務所のマンボ所長は「AMDAの活動はまだ始まったばかり。診療所の建設を知って他の地域からも、協力の要請が来ている。日本の人たちにこの国の現実を知ってもらい、効果的な援助をしてほしい」と語る。

また、アフリカ教育基金（AEF、本部・北九州市）はブクヤという小さな町で、エイズ孤児の養育費や学費を援助。週1回現地の医師、看護婦らの巡回診療を行っている。日本政府も、今年3月、カンパラに孤児院を開設した。

結婚前「陰性」の喜び

エイズ検査

カンパラのエイズ情報センター。若い男女が訪れた。2人は結婚を間に、同センターで検査を受けた。その結果を聞く前に、「若い男女が訪れた。2人はセンターのカウンセラー、トゥムハイルウェ・ケレンさん（40）が聞くと、二方が陰性で、二方が陰性ならどうしますか」と問いかけた。

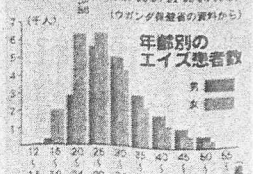
女性は「もう一度検査したい」と言った。そして、結果の発表。その場で陰性。2人の顔に笑みが浮かんだ。ケレンさんは「ハッピーなお知らせです」と結果を伝えた。

センターは看護婦2名、医師2名が行っている。受検者の8割は陰性だ。検査した日に、結果は判明する。ケレンさんはこのカウンセラーになって4年になる。これまで、毎日のように結果を伝えてきた。感染が判明し、泣き崩れる人や、「なぜ私の」と問いただす人などさまざまだという。

ケレンさんは、もし、エイズに感染していても、すぐに死を迎えるわけではありませんと言った。薬の開発も進んでいるので勇気をもって病気と闘いましょう、と問題を分けて説明します。ほとんどは、気持ちを取り直してくれます」と話す。

世界のエイズ患者15万人

世界保健機関（WHO）などによると、現在、世界のエイズ患者は約1・5万人。地域別では、南北米26万人、アフリカ25万人、欧州13万人などとなっている。国別では、米国が67万人で最多。タンザニアとブラジルが8万人、ケニア7万人、ジンバブエ6万人、ウガンダ、マラウイも5万人、タイ、仏、スペイン4万人など。感染者数ではアフリカが圧倒的に多く、サハラ砂漠以南のアフリカ大陸で800万人。以下、東南アジア250万人、南米160万人、北米75万人と推定されている。エイズで両親を失った「エイズ孤児」も増え、90年代末までにアフリカでこうしたエイズ孤児は1000万人を超えるという推計もある。また、この孤児がストリート・チルドレンになり、社会問題となっている。



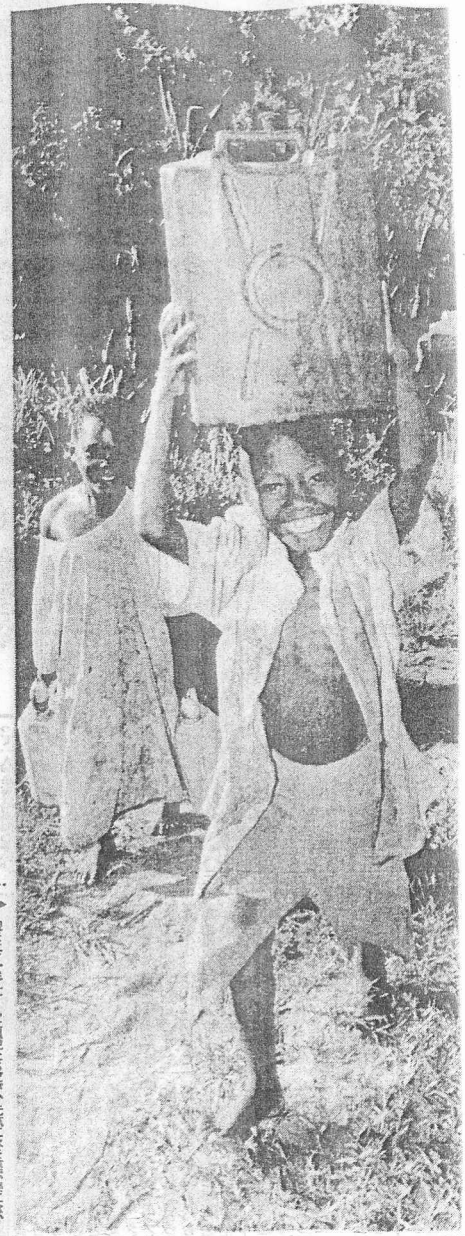
▶ウガンダのエイズ統計▶

ウガンダ保健省によると、1989年末までに届出された感染者は、累計で約25万人。エイズ関連死は83年17人、84年26人と急増は鈍化。87年ごろから急増し、89年に1万5339人、91年には2万1890人、昨年は5万1344人となった。

ウガンダをはじめアフリカのエイズの特徴は、男女による感染比の差が小さいこと。欧米では、男性同性愛者や麻薬中毒者の感染者が多いため、男性の比率が女性の数倍にもなる。ウガンダの場合、30歳までは女性の比率が男性を上回る。

患者の年齢別では、20代、30代が圧倒的に多い。また、感染した子どもは2歳までに死亡する例が多く、5歳までに死亡する例が多いにもなる。また、感染していても発症前に、マラリアなど他の病気で死亡するケースがある。

▶親をエイズで亡くした孤児たちだが、元気に水を運ぶ姿には、逆境に負けないたくましさがある＝ウガンダ・カンパラで



銃声はいらない

内戦孤児

ルワンダ、ブルンジ難民史

ルワンダ、ブルンジはともに1962年7月、ベルギーから独立、両国は経済的に支配していたため、部族間の緊張が続いていた。ルワンダでは94年4月、フツ族の大統領が乗っていた飛行機が撃墜されたことをきっかけに、フツ族民兵などがツチ族を虐殺、犠牲者は50万人とも100万人ともいわれる。仕返しを恐れたツチ族が周辺国に逃れ、260万人が難民になったが、昨年春頃、帰還が始まった。一方、ブルンジでは93年10月、フツ族大統領が殺害されたことを発端に、部族抗争が発生、五万人以上が殺害された。現在、タンザニアに67万人、隣国ブルイール（コンゴ民主共和国）に4万人のブルンジ難民がいる。

うつろな表情の子どもたち。内戦は幼い心に深い傷を残した＝タンザニア・ガラの難民キャンプで

独りぼっちはイヤだから

タンザニア西部、ルワンダとの国境の町・ガラは小さな農村だ。1994年以降、ルワンダ、ブルンジから隣の難民キャンプに80万人以上が逃れた。ルワンダ難民は昨年春頃、祖国への帰還が始まり、これまで半ほどが帰国。現在は、ブルンジ難民約10万人が暮らす。

児童ケア・保護・リラックスセンターのテント。テントに入ると、4畳半程度の部屋にセミダブル大のマットレスが、敷かれていた。

テントの主はオテレートちゃん（ピートロスちゃん、エミリアニちゃんの16歳の少女。緩衝関係はないが、95年ブルンジを逃れ、キャンプに来て知り合った。共に家族と生活されていた時、夜を初めてそこに来ほどんどが帰国。現在は、狭いベッドに3人が並んで寝る。

祖国での内戦で、母親、兄弟が殺されたり、逃げる途中に生き別れされて、キャンプには孤児や独りぼっちの子どもが多くいる。

少女3人 テントで同居

難民の住居は粗末で狭い。一つのベッドを共用する3人の少女＝タンザニア・ガラの難民キャンプで

GO「アフリカ教育基金の会」（AEF、本部・北九州市）のスタッフがキャンプ内を回り、独り暮らしの子どもやお年寄りを見つける活動を行っている。

植民地化が紛争の遠因

栗本英世さん

医立民族学博物館助教授

なぜ、アフリカで紛争が絶えないのか。アフリカの紛争が難しい民族間の緊張の背景に、理由を聞くと、西欧各国による植民地政策が、現在の紛争の遠因になっていることがわかる。

アフリカの紛争は19世紀の独立前後や、それ以降の植民地時代からその種なのかと、紛争することが必要とされた。

また、紛争の民族が指導者層を占めることになったことも紛争の要因。例えばウガンダでは、元は遊牧民だったな北部のナイル系の民族が、軍人や警察官に登用された。西欧人は遊牧系の民族は勇敢だと思ったからだ。ルワンダでも、遊牧系の支配者層になった。これが、少数派を多数派が支配する構図をつくった。こうしたことが根因になって独立後、部族間の対立が深まって戦争が起きた。それ以外に、スーダンのように、イスラム教対キリスト教の対立などもある。

また独立後の政府の正統性や正当性の程度が低いということも混乱の一因になった。国民が政府を自分たちの政府と思えないケースも多く、統治機構は広がっても、教育、民族対立に結びつくといったことがあった。

幼い心に深い傷

目の前で肉親殺され

少女の目は、一点を見つめたままだ。先生が熱心に話しかけるが、反応は鈍い。

タンザニアのブルンジ難民キャンプ。親・兄弟が殺されるシーンを目撃したことをその後の無反応。突然泣き叫ぶ。床の絵ばかりを描く……。ギャンプ内の第5小学校は児童約2,241人のうち、約400人にこうしたトラウマ（心の傷）を持つ子どもがいる。声が出なくなる。

ウマの症状がみられる。キャンプの第5小学校は、社会心理型の教師が派遣され、授業中や放課後に子どもの相談にのる。また、クラス全員でサッカーをしたり、ゲームをするなどして心を和らげるなど、何の治療もないとも言われる。

たった20院

ルワンダの孤児院

孤児院の洗濯風景。カラフルな服が物干しに並ぶ＝キブンゴで

スラッと並んだ色とりどりの洗濯物。孤児250人分の衣類だ。ルワンダ・キブンゴの孤児院「喜びの家」。インドで慈善活動を続けるマザー・テレサの教会が運営する。

ルワンダでは昨年春頃から難民の帰還が進むが、生活面などを巡り、孤児対策が大きな問題だ。親が殺されたり、流浪の旅で生き別れて孤児になった子どもが100万人以上と推定されているからだ。内戦で荒廃したルワンダにおいて、孤児院は多くの欧米を中心としたNGOや教会系の団体が孤児院を開いている。

「喜びの家」では、孤児全員の服を毎日洗う。服は、世界の慈善家から送られたものだ。今国でこうした孤児院はものすごく多い。孤児院で面倒を見てもらっている孤児は多くて見積もっても1万人に満たない。労働力として親類に引き取られたり、ストリート・チルドレンになって一人で生きる孤児もいる。

理解と支援を

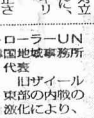
ゲイリー・トローラーUNHCR日本・韓国地域事務所代表

旧ザイール東部の内戦の激化により、昨年11月15日から4日間だけでも推定50万人ものルワンダ難民が旧ザイールから自国へ帰りました。タンザニアから帰還した人々も加えると、100万人以上のルワンダ難民が昨年末までに故郷に戻りました。

UNHCRはこのように自国へ帰った人々が1日も早く自分の故郷で安定した生活が送れるように、ルワンダ全国でさまざまな支援を行っています。例えば、住居、給水、保健、教育などコミュニティーに密着した復興プロジェクトを推進しています。

中でも、人口の約7割が女性であるために、女性の自立を支援するための「ルワンダ女性イニシアチブ」計画は今後特に強化していく必要があるプロジェクトです。難民生活をようやく終え、故郷で新たな人生を築くことに必死に取り組んでいるルワンダの帰還民へのご理解とご支援をお願いいたします。

和気邦夫・ユニセフ駐日事務所長



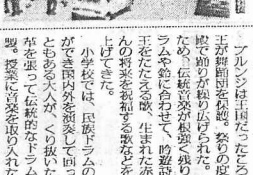
毎日新聞のキャンペーンは1979年にスタートしました。キャンペーンの初年、バングラデシュに勤務していた私は取材に同行し、大変勉強になったことを覚えています。以来、19年間の取り組みに敬意を表します。

19年前と比べると、子どもの置かれている状況は、さまざまな面で大きく改善されています。例えば予防接種率は、この19年間に15%から80%に上がり、毎年300万人の子どもの命が救われています。

しかし、民族紛争の激化とエイズの流行が、子どもにとって脅威になっています。今年のキャンペーンでは、ウガンダ、ルワンダ、タンザニアで、この二つの問題を中心に取材して下さいました。ユニセフが、そして、世界が直面するこれらの新しい問題について、読者の皆様のご理解を深めていただけることと期待しております。

今後ともユニセフの活動に対するご理解とご支援をお願いいたします。

土の家



学校の建設は保護者が第一。建物より先にトイレの穴掘りが始まる＝タンザニア・ガラの難民キャンプで

ルワンダは今、土の家（シェルター）の建設が進む。昨年春ごろから始まった難民帰還に合わせてUNHCRがNGOなどと協力して進めている。

内戦中、多くの民家が破壊され、住宅が不足。土を固めてブロック（縦50センチ、横25センチ、深さ20センチ）をつくり、それを約3000枚積んで1軒のシェルターを建てる。NGOなどが協力してスコップなどで、深さ2・5センチまで掘る。木の根や大きな石があり、はかどらない。炎天下でやってみると、汗が噴き出し、10分ほどで腕がパンパンになった。父母がもう一タンザニア政府から、いつキャンプから出ていけと言われるかからないと、校舎の建設は大事だが、むなしくなる時もあるとの複雑な胸の内に触れる声も聞かれた。

トイレから

タンザニア・ガラのブルンジ難民キャンプ。約7万人のキャンプに小学校が11校あるが、校舎があるのは2校だけ。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）から教育と医療を分担することになった国際NGO「AEF」が大急ぎで校舎を建設中だ。

まず、便所のための穴掘り。キャンプの衛生を保つために必要だ。教師、父母が協力してスコップなどで、深さ2・5センチまで掘る。

今年のキャンペーンでは国連機関などへの寄付に加え、ウガンダの子どもたちをエイズから守るプロジェクトをサポートします。義援金は左ページ「郵便振替で送金いただくか、直接ご持参ください。

〒530-51 大阪市北区梅田3-4-5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係（郵便振替・00970-9-12889）

救援金募集

救うためのプロジェクトをサポートします。義援金は左ページ「郵便振替で送金いただくか、直接ご持参ください。

〒530-51 大阪市北区梅田3-4-5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係（郵便振替・00970-9-12889）

「平和」の鼓

タンザニア・ガラのブルンジ難民キャンプ。小学生を中心に、伝統音楽を学び糧にしようという動きが生まれている。

ブルンジは王国だったころ、国王が舞踊団を保護。祭りの席に宮殿で踊りが盛りに広げられた。このため、伝統音楽が根付く。ドラムや鈴に合わせて、吟遊詩人が王をたたえる歌、生まれた赤ちゃんの将来を祝福する歌などを歌い上げてきた。

小学校では、民族ドラムの演奏ができる民族学を選択科目として取ることもある。大人が、くり抜いた木に革を張って伝統的なドラムを作製。授業に音楽を取り入れたり、太鼓の好きな男子を集めて放課後、教えるなどしている。また、女の子には踊に鈴を付けて、歌に合わせてステップを踏み鳴らす踊りを指導。子どもたちも大人が高い、声がの下で力強い太鼓や歌を聞かせる鈴の音が響いている。特に「アマ・ホロ」（ブルンジの言葉で「平和」）と繰り返し叫び、平和を祈願する歌が子どもたちに好んで演奏される。

編集・レイアウト　鴨神　大平